

1960年代の来日公演と欧米の ポピュラー音楽の受容

——ザ・ビートルズ日本公演前後まで——

長谷川 倫子

はじめに

1966年6月29日午前3時39分、英国のロックバンドである〈ザ・ビートルズ〉(The Beatles)は最初で最後となった日本公演のために羽田空港に降り立った。すでにヨーロッパやアメリカでの人気をゆるぎないものとしていた当時のポピュラー音楽界の寵児たちが初めて訪れた日本は、そのファン・コミュニティをアジア圏にまで広げ、所属レーベルのさらなる販路を拡大し、新作レコードの売り上げ増を目指すという重要なミッションの込められた演奏旅行の目的地の一つでもあった。ドイツでの公演を終え日本に向かった一行は台風のためアンカレッジで足止めされたこともあり、その到着は真夜中となった。待機していたピンクのリムジンを目指してタラップを降りるメンバーたちは異国情緒たっぷりの法被（はっぴ）をまとい、来日を待ちわびていた日本のファンたちの前にその姿を披露した。ここから5日間にわたり日本中が喧噪と熱狂の渦に覆いつくされたとされている「ビートルズ旋風」の伝説がスタートしたのである。

大西洋航路の中継点でもある港町リバプールでアメリカのポップ音楽の影響を受けて育った4人の若者たちによって1960年代の初頭に結成されたロックバンドである〈ザ・ビートルズ〉は、その斬新な音作りで当時の若者的心をとらえた。やがてその人気は英國国内に留まることなく、1964年にはアメリカ進出を果たすことで世界的なスーパー・スターへの階段を駆け上っていくことになる。その人気は日本でも例外ではなく、今日の日本でも〈ザ・ビートルズ〉の人気は衰えを見せることなく、世代を超えたそのファン層の厚さと熱量は突出している。

距離的にも欧米からははるか離れた辺境の地—ファー・イーストにあり、また英語圏の文化受容において常に克服しなければならない言語の壁が立ちはだかる日本での〈ザ・ビートルズ〉の成功に着目し、この日本公演についての詳細な研究を行ったスティーブンス（[Stevens], 2018）は、このジャパンツアーを1960年代のグローバルなポピュラー音楽シーンのなかで大きな意味を持つ出来事ととらえている。それは、この日本公演によって、〈ザ・ビートルズ〉はその世界的な人気を得ていることを知らしめ、さらにこの出来事は、英國の

1960年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

ポップスターがその楽曲を通じてアングロサクソン文化圏の境界線を越え、思いを共有する彼らのファン・コミュニティをさらにアジア圏にまで拡大させたという快挙—すなわち、文化地理学（Cultural Geography）の視点からも興味深い出来事であったとしている。1966年のわずか数日間に首都東京で行われた外国人アーティストによる5回のライブ・コンサートをめぐる当時の日本社会の反応に着目したこのような学術書が、欧米のアカデミアからも登場しているのは意義のあることである。

日本人が敗戦によって取り戻したもの一つにラジオから流れるようになった欧米のポピュラー音楽がある。ここから日本人は、軍歌一辺倒であった戦時体制下の音楽シーンから解放され、まずはジャズに始まり、さらに英語圏の音楽だけでなく、フランス語のシャンソンやイタリア語のカンツォーネ、アルゼンチンのタンゴ等、世界中の様々なジャンルの音楽を享受する自由を取り戻した。

〈ザ・ビートルズ〉の日本公演をテレビ視聴し、その後の日本の若者の間で沸き上がったGSブームに続くフォーク・ソング・ブームを経てウェスト・コースト・サウンドのファン・コミュニティに身を置いた筆者の体感では、いかなる時代においても、その時代の若者たちによって作り出されていた音楽シーンは、多面的・重層的で、多様なジャンルの音楽が混在しており、このビートルズ旋風は、ある一つのジャンルの楽曲が海外から流入し、それが日本社会の受け皿に適合し、人気の盛り上がりとともにファン・コミュニティが拡大していくといった現象の一つであり、それは同時進行で様々なジャンルの音楽も同様に日本に流入する中での出来事でもあると考えられる。喧噪と物々しい空気の中、日本でのミッショングを終えて次の公演が予定されていたマニラに向けて飛び立っていった〈ザ・ビートルズ〉であったが、後にこのロックバンドが偉大な音楽家として高く評価されるようになり、武道館でのパフォーマンスも含めた日本上陸が、その後半世紀以上の時を経て伝説として語り継がれるまでになるとは、当時のほとんどの日本人は想像もしていなかったはずである。

焼け跡からの復興を遂げつつあった1960年代の日本において、欧米のポピュラー音楽はどのように紹介され、戦後生まれの若者たちが欧米から流入した文化をどのように受け入れ、それらは日本人に何をもたらしたのかという問題意識を出発点として、本研究では1960年代の日本の音楽シーンにおける洋楽受容の実相に着目した。

〈ザ・ビートルズ〉来日も含めた戦後の洋楽の受容に関する研究は、これまでにも数多く出されているが、まずは日本におけるポピュラー音楽研究の先駆者でもある三井徹の『戦後洋楽ポピュラー史 1945-1975 資料が語る受容熱』を抜きにこのような議論を始めることはできないだろう。ジョン・レノン（John・Lennon）やボブ・ディラン（Bob・Dylan）と同年代でもある三井は、自らの経験を踏まえて当時の雑誌や新聞などの一次資料を丹念にたどりながら、戦後の日本人がどのように西欧社会のポピュラー音楽と向き合ってきたのかを検証しているが、この三井の研究成果をみても、終戦からの日本では、様々なジャンルの音

楽が入り混じる多面的・重層的な音楽シーンが形成されて行ったことを確認できる。それらは、ジャズ、ロック、フォーク、ラテン、シャンソン、カンツォーネ等であり、そのメッセージジャーの役割を果たしたのは、海外のレーベルでデビューを果たし、日本でもそのレコードの売り上げ好調により来日をかなえることになったアーティストたちであった。ビートルズ旋風は落下傘のように欧米社会からいきなり降りてきたものではなく、戦争で中断させられていた欧米のポピュラー音楽の享受が占領をきっかけに復活し、とりわけ英米のポピュラー音楽が身近になって行ったからこそその出来事であった。

研究対象を1960年の初頭から〈ザ・ビートルズ〉来日までに限定したのは、日本のポピュラー音楽史上最大の出来事として多くの日本人が記憶している〈ザ・ビートルズ〉の日本公演が1966年であったことに加え、焼け跡から再出発した日本人が、莫大な出演料を支払い「外国人タレント」と呼ばれた欧米の芸能人を招聘することができるようになったのは1960年の半ば以降であったことも理由の一つである。いかなるジャンルであっても、レコードやラジオで繰り返し聴いた楽曲のアーティストやグループが来日して生演奏で披露してくれるという機会は、復興と経済成長を遂げた日本人に与えられた最高の贅沢の一つである。

1970年代になると、海外のミュージシャンにとって日本は、レコードの売り上げだけではなく、訪日によるコンサート・ツアーでも収益を上げられる魅力的なマーケットとなり、堰を切ったように外国人アーティストの来日ラッシュが始まる。また、プロモーション活動としての来日公演の側面もさらに重みを増すようになった。著名な外国人アーティストの訪日は話題となり、各種メディアへの露出も伴うことから、グローバルな展開を目指す海外レベルのアーティスト達の世界制覇には欠かせないものとなっていく。

ポピュラー音楽が、マス・セールスを行うマス・プロダクトとしての規模をさらに拡大させていく時代の先駆けともなった1960年代は、外国人アーティスト招聘の黎明期でもあった。ここでは、このような時代に日本を訪れてそのステージでファンからの熱い視線を集めている欧米のポピュラー音楽のバンドやグループに着目し、日本人の洋楽受容の事例について考察を試みる。「受容」という言葉について三井（2018）は、「洋楽ポピュラーを日本人が実践し、そこから新たな日本の音楽を作り出すこと」¹⁾であると定義しているが、本研究は、パイオニアである三井の功績に感謝しながら、後に続くための出発点でもある。

第1章 アーティストの来日公演

まずは1960年代の初頭以降から〈ザ・ビートルズ〉の日本公演まで、実際にどのようなアーティストが日本のステージに登場したのかを見ていこう。図表1は1960年代に公演のために訪日したアメリカと英国のロック、フォーク、カントリー等のグループを選んで時系列にリストアップしたものである。出典は、1960年代と1970年代の欧米のミュージシャン

1960年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

図表1：1960年代に日本公演を行ったグループやバンド

来日年度 () 内は月	グループ名	出身国	公演会場等
1961 (1)	キングストン・トリオ（初）	米国	約1週間ナイト・クラブ、米軍キャンプで巡演
1962 (4)	ブラザーズ・フォー（初）	米国	サンケイホール、大阪フェスティバル・ホール
1962 (5)	ベンチャーズ（初）	米国	新宿コマ劇場、米軍キャンプ巡演
1962 (10)	ジョニー・キャッシュとテネシー・スリー	米国	米軍キャンプ巡演
1964 (5)	ブラザーズ・フォー（2度目）	米国	不明
1964 (5)	ロイ・エーカフとスマーキー・マウンテン・ボーイズ	米国	新宿厚生年金会館、大阪毎日ホール、神戸国際ホール
1964 (6)	ピーター、ポール&マリー（初）	米国	サンケイ・ホール、新宿厚生年金会館、他
1965 (1)	アストロノウツ（初）／ベンチャーズ（ベンチャーズは2度目）	米国	新宿厚生年金会館、大阪フェスティバル・ホール、愛知文化会館、横浜文化体育館
1965 (4)	ピーターとゴードン（初）	英国	新宿厚生年金会館、神戸国際会館、渋谷リキ・パレス、名古屋体育館、渋谷公会堂
1965 (5)	アニマルズ	英国	不明
1965 (7)	ベンチャーズ（3度目）	米国	新宿厚生年金会館他28都市で58回公演
1965 (10)	キングストン・トリオ（2度目）	米国	新宿厚生年金会館、サンケイ・ホール他
1965 (10)	ポップ&カントリー・フェスティバル チェット・アトキンズ他	米国	新宿厚生年金会館他
1965 (10)	キングストン・トリオ（3度目）	米国	新宿厚生年金会館、サンケイ・ホール他
1965 (10)	ブラザーズ・フォー（3度目）	米国	不明
1966 (1)	アストロノウツ（2度目）	米国	サンケイ・ホール、文京公会堂
1966 (1)	ビーチ・ボーイズ（初）	米国	渋谷公会堂、名古屋、大阪、京都、神戸、広島、福岡、新宿厚生年金会館、仙台、静岡、横浜、東京音協
1966 (2)	スプートニクス（初）	米国	渋谷公会堂、大阪サンケイ・ホール、札幌、山形、酒田、福岡、愛知、神戸

来日年度 () 内は月	グループ名	出身国	公演会場等
1966 (2)	ハーマンズ・ハーミッツ (初)	英國	京都会館2回、大阪3回、神田共立講堂他
1966 (3)	ベンチャーズ (4度目)	米国	
1966 (3)	エヴァリー・ブラザーズ	米国	1日のみ座間米軍キャンプ
1966 (3)	ニュー・クリスティー・ミン ストレルス (初)	米国	読売ホール、新宿厚生年金会館、神戸国際 会館名古屋市公会堂、大阪フェスティバル・ ホール、京都会館
1966 (6)	ザ・ビートルズ (初)	英國	武道館
1966 (7)	ベンチャーズ	米国	一か月半滞在
1967 (1)	ピーター、ポール&マリー (2 度目)	米国	新宿厚生年金会館、大阪フェスティバル・ ホール、神戸国際会館、日比谷公会堂、京 都会館
1967 (2)	ウォーカー・ブラザーズ (初)	英國	公演なし
1967 (2)	バック・オウエンズとバックカ ルー (初)	米国	新宿厚生年金会館、サンケイ・ホール、大 阪朝日ホール、京都
1967 (6)	シャドウズ (初)	英國	静岡、サンケイ・ホール、大阪、富山、名 古屋
1967 (6)	ピーター、ポール&マリー (3 度目)	米国	武道館他
1967 (8)	ブラザーズ・フォー (4度目)	米国	新宿厚生年金会館、神戸、京都会館、大阪 フェスティバル・ホール、

註：【公演会場等】の欄では公演会場と巡演した都市名が入り混じっているが、これは参考資料の記載さ
れている情報をそのまま転記したことによる。また、原資料が空欄であったものは「不明」とした。

出典：草野昌一『ライヴ・イン・ジャパン～ロック感動の来日公演史』(シンコーミュージック、1995
年) 228～234頁より作成

1960年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

による日本公演を網羅的にまとめた雑誌『ライヴ・イン・ジャパン～ロック感動の来日公演史～』（草野、1995）であり、その巻末に添付されていた1958年から1979年の間に来日したアーティストを時系列でリストアップしたものから作成したものである。このリストは戦後の日本でどのような欧米のポピュラー音楽が紹介されたのかを知る手がかりとなり、また日本でのレコードの売り上げが好調で、日本のファンの熱意にこたえ、収容人数の多いホールのコンサートが実現した外国人アーティストの日本における足跡を物語るものもある。その数はグループよりも男女ともに個人のほうが圧倒しているが、本論では複数のメンバーによるデュオ、トリオやグループを研究対象とした。またこの間、黒人のボーカルグループやフランスやイタリアのグループも数多く来日していることも確認できたが本研究では対象外とした。

図表1にある公演会場のラインアップから、まずこの時代の音楽シーン固有の傾向の一つとして指摘できるのは、占領期の日本各地にアメリカ軍の駐留する施設が設営されたことを反映して、軍関係者への慰問活動としてアメリカの歌手やグループがその中にある施設を訪れて巡演公演を行っている点である。この資料に登場したものだけでなく、実際のこところはもっと多くのアーティストが日本に来て巡回公演をしていたはずであるが、現時点では関連する資料を入手できていない。

またさらに興味深いのは、このリストの中に公演会場として赤坂の「ミカド」、「ニュー・ラテン・クオーター」、「花馬車」などのナイト・クラブ²⁾やダンスフロアのある「ムゲン」などの遊興施設が記録されている点である。この時代の日本のビジネス交渉では、アフター・ファイブには食事の後、キャバレー・バー、ナイト・クラブなどと呼ばれた社交場に移動し、飲食物や酒等の供与によるコミュニケーションが重視される傾向にあり、このような夜の娯楽施設は賑わいを見せていた。このような施設に完備されたステージやダンスホールでは、流行歌や欧米のポピュラー音楽のショーもあり、このような場所でアメリカのトップスターも公演を行っていたことが記録されているのは特筆に値することである。

次章からは、図表1の中でもとりわけ当時の若者に人気があったとされているカントリー音楽とフォーク音楽に着目し、それぞれみていく。

第2章 占領下の日本—カントリー音楽のスターたち

占領直後から、アメリカ軍が駐留するための施設（U.S. Military Base Camp/Army Camp）の設営によって日本各地に日本人オフリミットの空間が次々と作りだされた（以下では俗称「米軍キャンプ」を用いる）。駐留している軍関係者には本国と同じようなライフスタイルで過ごせるよう、住居だけでなく、アメリカの物資を購入できる商業施設等も完備されていた。日本国内にいながらも、米軍キャンプ内では外国にいるという違和感を抱かせ

ないようなアメリカ国内さながらのコミュニティが各地に形成されており、週末には兵士たちや軍関係者たちがリフレッシュできるよう、ダンスホールやコンサート会場での慰安活動プログラムも提供されていた。そのような各地の施設に本国から芸能人が慰問のために来日することもあったのはごく自然なことであった。

日本に派遣されたアメリカ軍関係者の大半はアメリカの地方出身のもので占められていたこともあり、カントリー音楽は故郷への郷愁を駆り立てる音楽として、週末の娯楽施設で最もニーズの高いジャンルであった。本研究で用いた資料にも含まれていた本国からのビッグスターの来日の折などはさぞかし盛り上がったことであろう。

本研究で用いた資料に含まれていた、4組のカントリー音楽のバンドによる日本公演の記録は、1962年10月の〈ジョニー・キャッシュ (Johnny Cash) とテネシー・スリー (Tennessee Three)〉、1964年5月の〈ロイ・エーカフ (Roy Acuff) とスモーキー・マウンテン・ボーイズ (Smoky Mountain Boys)〉、1965年10月の「ポップ&カントリー・フェスティバル」にバンドとともに参加したチエット・アトキンス (Chet Atkins)、1967年2月の〈バック・オウエンズ (Buck Owens) とバッカロー (Buckaroo)〉であり、いずれも本国のカントリー音楽界では大御所と言われていた者たちが日本各地でステージを務めていたことがわかる。以下ではそれぞれのグループについて詳述する。

〈ジョニー・キャッシュとテネシー・スリー〉

図表では米軍キャンプのみでの公演となっているが、1962年10月に来日しているジョニー・キャッシュは当時のカントリー音楽界で最も人気のあったボーカリストのひとりである。1956年のアイ・ウォーク・ザ・ライン (I walk the line) が全米1位を獲得しトップ・スターの仲間入りをしたジョニー・キャッシュはまた、ギターによる独特の演奏方法を作り出したカーター・ファミリーのメンバーとの婚姻関係によって、カントリー音楽界における地位を不動のものとした。

1958年にCBSに移籍し、1960年からはバックバンドにドラムが加わりテネシー・スリーとなった³⁾。来日時期は彼の絶頂期でもあり、彼のようなスーパー・スターによる慰問は会場から拍手喝采で大歓迎されたことであろう。

〈ロイ・エーカフとスモーキー・マウンテン・ボーイズ〉

カントリー音楽界のキングと呼ばれナッシュビルの最高権力者として君臨したロイ・エーカフとスモーキー・マウンテン・ボーイズの来日公演は1964年5月となっている。ナッシュビルをアメリカのカントリー音楽の聖地と言わしめているのは1925年から続くラジオ番組グランド・オレ・オープリー (The Grand Ole Opry) であるが、エーカフは1938年からこのステージに立ち、1962年から創設されたカントリー音楽家の栄誉を称えるホール・オ

1960年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

ズ・フェイム（Hall of Fame）の初代受賞者にも選ばれた。またエーカフはベトナム戦争の折にも慰問活動のために前線の兵士を慰問している⁴⁾。

〈チエット・アトキンズ〉

ナッシュビル・サウンドの立役者の一人となったギタリストがチエット・アトキンズである。シンシナティなどのラジオ放送局を経てナッシュビルに移り、1940年代からアトキンズはそのギター技術で頭角を現した。数多くのレコード会社のレコーディング・スタジオが集中し、カントリー音楽産業のメッカであるナッシュビルでは、彼のようなギターテchniqueを持った演奏家は尊重されたこともあり、RCAのセッション・ギタリストとしてナッシュビル発のカントリー音楽をより洗練したものへと発展させた。キャッシュ・ボックス誌の投票で最も優れた楽器演奏者としてトップの座を獲得したこともある⁵⁾。

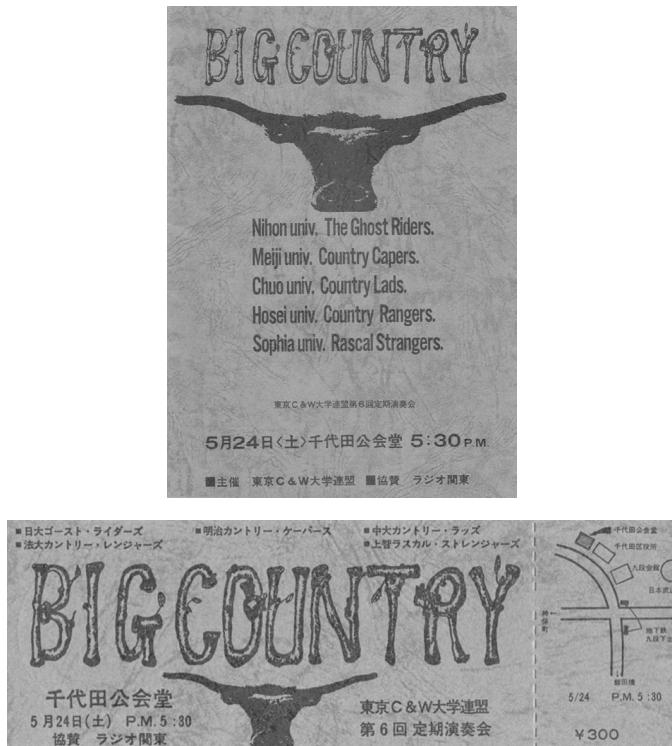
〈バック・オウエンズとバッカルー〉

ナッシュビルと並んでアメリカ国内でも屈指のカントリー音楽のメッカであるベイカーズフィールド（Bakersfield）は1950年代にこの地にやってきたバック・オウエンズによって作られた⁶⁾。ナッシュビルとベイカーズフィールドとの大きな違いは、サンフランシスコとの距離にある。1980年代になると、イーグルス（Eagles）などによるウエスト・コースト・サウンドが世界的なブームとなるが、この大躍進の下支えをしたのがベイカーズフィールドとつながりのあったアーティストたちであった。1967年の初来日で東京、大阪、京都を巡演したバック・オウエンズは、1975年3月にも来日しており⁷⁾、翌年の1976年3月のイーグルス初来日は日本でのウエスト・コースト・サウンド・ブームの幕開けをつげるものとなった。バック・オウエンズが、さかのほること1960年代から日本でのファンを獲得し、バンドとともに日本で公演を行っていたのは、このような時期から彼らを招聘した日本のカントリー音楽ファンの熱量だけでなく、日本のポピュラー音楽の受け皿の幅の広さを感じずにはいられない。

上述したアーティストに限らず、カントリー音楽界の実力者が数多く来日公演を行っているのは、目利きのプロモーター抜きには実現しなかったはずである。たとえばプロモーターの一人である麻田浩氏は、これまでに数多くのアメリカのカントリー音楽のミュージシャンを探算度外視で招聘してきた。また麻田氏は、学生時代には、日本のカレッジ・フォークのグループの中でも最も人気のあったグループの一つで、明治学院大学の学生を中心に結成された〈モダン・フォーク・カルテット〉にも参加していた。

ギター愛好家のための雑誌であるGuitar Magazine（2019年2月号）の中の、彼へのインタビュー記事の中で、麻田氏が大学に入学した1963年の軽音楽部では、カントリーとハワ

図表2：学生バンドの定期演奏会BIG COUNTRYのプログラムと入場券



イアンとジャズが中心となっており、中でもカントリー音楽は最も人気のあるジャンルであったと述べている。また、他大学のカントリー・バンドで日本に紹介されたばかりのバック・オウエンズをカバーしているグループがあったことも麻田氏は記憶しており、当時のカントリー・バンドの人気は首都圏に留まらず、関西でも同様であったと述べている（Guitar Magazine, 2019年2月 69頁）。

図表2は、1970年代においても大学のカントリー・バンドが代々受け継がれていたことを示す資料である。これは首都圏の5つの大学のバンドが、1975年に千代田公会堂で第六回目の定期演奏会を開催した折のプログラムと入場券である。主催は東京C&W大学連盟でこのコンサートはラジオ関東の協賛を得ている。

各大学からの参加バンドは、日本大学の〈ゴースト・ライダーズ〉、明治大学の〈カントリー・ケイパース〉、中央大学の〈カントリー・ラッズ〉、法政大学の〈カントリー・レンジャーズ〉、上智大学の〈ラスカル・ストレンジャーズ〉であり、図表3は、各バンドの演奏曲目をリストにまとめたものである。

プログラムにはそれぞれのグループメンバー紹介、演奏予定の楽曲から選んだ主な3曲の曲名と、簡単なメッセージが添えられている。このメッセージ欄には、中央大学の〈カント

1960 年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

図表 3 : BIG COUNTRY (1976 年 5 月 24 日) 参加大学とその演奏曲等

バンド名	大学名	演奏された曲目	人数
The Ghost Riders	日本大学	The fool such as I One night stand Alabama Jubilie	7 (女子 1)
Country Capers	明治大学	I saw the light State's side Track drivin' man	5
Country Lads	中央大学	Good crockin' tonight Cryin' time The weight etc.	7 (女子 1)
Country Rangers	法政大学	Hello Mary Lue Hey good lookin' Colorado	8 (女子 1)
Rascal Strangers	上智大学	故郷に帰りたい You'd better think twice あした天気になあれ	6

註：プログラムから作成。「The fool such as」はハンク・スノウの、「A fool such as」と思われる。また「Good crockin' tonight」は作曲者やカバーしたボーカリストは不明のままである。

リー・ラッズ〉は 10 代目で、日本大学の〈ゴースト・ライダーズ〉は創立 16 年目であると明記されており、1960 年代から、東京の各大学では部活動の中で、カントリー音楽のバンドが代々引き継がれていたことがわかる。

ここでカバーされている楽曲を概観すると、その大半がカントリー音楽のスタンダードナンバーであり、バンジョーやフィドル等の楽器が加わっているグループがあるのも納得せられる。またこの表に登場する楽曲、「Track drivin' man」と「Cryin' time」は、前述したバック・オウエンズの楽曲である。また、カントリー音楽とロックが融合して発展したウエスト・コースト・サウンドに着目し、カバーを試みていたものや、日本語の歌詞の曲では、加川良の「あした天気になあれ」など、それぞれの大学のグループが独自性を發揮して、学園生活の中でバンド仲間との演奏を楽しんでいた様子が伝わる。

第 3 章 都会の若者たちとモダン・フォーク・ミュージック

1957 年にサンフランシスコで結成され 1960 年代のモダン・フォーク・グループ人気の先駆者となった〈キングストン・トリオ〉(The Kingston Trio) の初来日は 1961 年 1 月 24 日で、公演会場はナイト・クラブと米軍キャンプとなっている。アメリカ本国で大ヒットとな

った楽曲「トム・ドゥーリー」のレコードの売り上げは日本でも好調だったようで、洋楽ファン向けの雑誌である『ミュージック・ライフ』⁸⁾の調べによる1959年の売り上げランキングでは、2月—1位、3月—3位、4月—5位となっている⁹⁾。1960年のアメリカのポピュラー音楽情報を紹介する同誌のコラムには、ニューポート・ジャズ・フェスティバル出演など、〈キングストン・トリオ〉がアメリカのトップ・スターの座に君臨するグループとして紹介されている¹⁰⁾。このような日本での人気は一過性に終わることなく、1964年、1965年にも来日し、都内の大きなホールでの公演を行っている。

さらに〈キングストン・トリオ〉と並んで日本の若者に大きな影響を与えた〈ブラザーズ・フォー〉(The Brothers Four)の初来日は翌年の1962年10月であったことがわかる。1958年に西海岸のワシントン大学の学生によって結成され、1960年にヒットした楽曲「グリーン・スリーブス」の人気で来日を果たした。この後も、〈ブラザーズ・フォー〉は日本公演を繰り返し行っており、図表1からも、1964年5月、1965年10月、1967年8月にも来日していることがわかる。

1970年代には、このような外国人の音楽家を招聘し、国内の演奏会場での公演をアレンジすることで収益を得るビジネスモデルに特化した仲介業者が数多く出現するが、その黎明期はまさに1960年代である。その大手エージェンシーの一つでもある「キヨードー東京」が1973年の〈ブラザーズ・フォー〉の10回目の来日公演に際して発行した冊子(1973年8月10日)には、この日本公演の詳細なスケジュールが記されている。この広報用の冊子には、結成15年目を迎える、再度のメンバーチェンジとレーベルの移籍を経て、〈ブラザーズ・フォー〉は、デビュー時の原点もある「グリーン・スリーブス」に戻るとある。国内巡演のスケジュールを見ると、東京の4回と大阪の3回の公演に加え、日本各地27の都市を巡回して公演を行っており¹¹⁾、9月3日の大阪公演から10月13日の静岡の吉原市までのステージをそれぞれ各日1回公演としてその数を合計すると、日本ツアーでの公演回数は32回にも及ぶ。これは日本全国各地に彼らのスタンダードナンバーの生演奏を待ちわびるファンがいたことを示し、1960年代の初頭に日本デビューを果たしたこのグループの人気は時間を経ても変わることはなく、1970年代になっても多くの日本人を魅了していたことを示している。

〈キングストン・トリオ〉、〈ブラザーズ・フォー〉と並んで、当時の日本の若者を魅了したもう一つのモダン・フォーク・グループはPPMという略称で知られている1961年に結成された〈ピーター・ポール&マリー〉(Peter, Paul & Mary)である。1962年に「レモン・トゥリー」でデビューし、1963年には「パフ」やボブ・ディランの楽曲をカバーした「風に吹かれて」、「くよくよするなよ」などのベストヒットによってグラミー賞を受賞している¹²⁾。その初来日は1964年6月で、1967年には1月と6月に二度も来日し、この三度目のツアーでは武道館での公演も行っている。

本研究では、複数で活動しているアーティストに焦点を当てたため、図表にはないが、単

1960年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

独で来日したアーティストの中にも注目に値する者たちが含まれている。中でも反戦活動が盛り上がりを見せたアメリカで、異議申し立ての手段の一つとして欠かせないものとなったのがフォーク音楽であったが、フォークの女王として牽引したジョーン・バエズ（Joan Baez）の来日は1967年1月で、大きな話題となった¹³⁾。

また、バエズと並び、アメリカのモダン・フォーク・ムーブメントのリーダーとして活躍したピート・シーガー（Pete Seeger）は、1963年10月と1967年9月に来日している¹⁴⁾。ハーヴァード大学入学後の歌収集の旅で出会ったフォークシンガーの影響を受けフォーク・グループで活動するようになったピート・シーガーは生涯反骨精神を貫き、フォーク・フェスティバルを復活させ、また多くのフォークシンガーを育てたことが高く評価されている。1967年の公演会場には武道館も含まれており、ジョーン・バエズと並んで当時の日本のモダン・フォーク音楽のファンたちから最も敬愛されたミュージシャンの一人もあった。

ここで紹介した〈キングストン・トリオ〉、〈ブラザーズ・フォー〉、PPMはその音楽活動の実践に关心を持った当時の日本の若者たちに演奏スタイルやグループ編成の理想的なロール・モデルを提供した。理想とする本場のフォーク・グループやデュオのスタンダードナンバーの忠実な再現を目指しながら、いかにリズムをとりながらメッセージ性のある歌詞の楽曲をメロディーにのせて演奏したらよいのか、そのためのメンバー編成のあり方のみならず、アコスティック・ギターやウッド・ベースなどの微妙な演奏技法に至るまで、日本のフォーク音楽愛好家たちにとって、本場アメリカからのアーティストによるステージは、オリジナル演奏の完璧な再現を目指すうえでの大切な学びの場でもあった。

当時のフォークソングの盛り上がりを教えてくれるものとして、〈ザ・ビートルズ〉来日が迫り、何かと話題に上っていた頃と同時期にあたる1966（昭和41）年4月24日の朝日新聞が、日本の若者たちがアメリカのフォーク音楽に熱狂するさまを、「フォークソング大はやり」という見出しで取り上げ、以下のように伝えているものがある：

最近、フォークソングが大学生を中心とする歌好きの人々の間ですごくはやっている。ひとつのエレキブームのようなハデな騒がしさはないが、若い人たちにとってのその魅力はなかなか大きいようだ。フォークソングが日本に入って来たのは三、四年前。アメリカのジャズとは別に、歌手と聴衆が一緒になって歌う“新民謡”が生まれ、これがフォークソングを呼ばれた。

記事は、1200名の聴衆で埋め尽くされたアマチュアの学生連盟が主催した演奏会（有楽町・読売ホール）の様子を伝ており、この会場の熱気は大学生を中心としたフォーク・ソング・ブームの高まりによるものと伝えている。またこの記事では、当時流行していた「風に吹かれて」や「花はどこに行った」といった楽曲が戦争の悲惨さを描いていることは知りな

図表4：雑誌の付録『フォーク・ソング専科』の表紙写真



出典：平凡パンチ DELUX 特別付録、1966（昭和41）年11月

がらも、日本の若者たちにこれらの楽曲は「ギターを交えたきれいなメロディー」とうつり、日本人の心を打つのは甘い抒情的な歌であり、このブームにレコード会社も拍車をかけているという指摘も加えられている。

それではなぜ当時の若者がこのように、アメリカのモダン・フォークのグループに引き付けられたのだろうか？その理由の一つとして、〈ザ・ビートルズ〉の人気にも共通することであるが、高校や大学への進学のためには必須科目である英語の学習が尊重されたこともあり、英語のポピュラー音楽の親しみやすい歌詞と、英語学習者でもあった当時の若者たちとの親和性の高さが考えられる。さらに高校や大学では部活が奨励され、学校の文化祭という練習の成果を披露できる場が提供されていた。また、エレキ・ギターに比べるとフォーク音楽の演奏に用いられていたアコースティック・ギターは相対的に安価であった点も、その人気を後押しした可能性として考えられるだろう。

図表4は、当時の若者に人気のあった週刊誌『平凡パンチ』の特別号の付録である『フォーク・ソング専科』の表紙である。この冊子には、英語の楽曲が21と、日本語の楽曲15曲が掲載されており、それぞれの見開きの2ページに1曲という割り振りで、その曲の楽譜と歌詞が掲載されており、楽譜にはギターのコード記号も添えられている。この表紙に「HOW TO PLAY THE FOLK GUITAR」とあるように、この冊子は、ギターを持ったことのない初心者でも、どうしたらギターを弾きながら歌うことが出来るようになるのかを教えてくれる独習書にもなっている。コードとは何かに始まり、それぞれのコード記号では、ギターのネックのどの部分を指で押さえたらよいのか、ギターの弦をどのようにストローク（はじくこと）したらよいのという点まで詳しく解説されている。

1960年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

図表5：『フォー・クソング専科』に掲載された英語の楽曲

楽曲名	日本語のタイトル
Monday Morning	マンデー・モーニング
Jesus Met The Woman	井戸端の女
Gone The Rainbow	虹とともに消えた恋
Four Strong Winds	風は激しく
All My Trials	オール・マイ・トライアルズ
Tell It On The Mountain	テル・イット・オン・ザ・マウンテン
San Francisco Bay Blues	サンフランシスコ・ベイ・ブルース
If I Had A Hammer	天使のハンマー
The Cruel War	悲惨な戦争
Blowin' In The Wind	風に吹かれて
Clementine	いとしのクレメンタイン
What Have They Done To The Rain?	雨を汚したのは誰れ
East Virginia	イースト・バージニア
Donna Donna	ドナ・ドナ
Summer Green And Winter White	夢見るバラの乙女
Five Hundred Miles From Home	500マイル
Yesterday	イエスター
Michelle	ミッセル
The Midnight Special	ミッドナイト・スペシャル
Cotton Fields	コットン・フィールズ

出典：平凡パンチ DELUX 特別付録、12-51 頁。1966（昭和 41）年 11 月

さらに、この冊子には広告も掲載されているが、それらは、PPM の最新アルバム（東芝音楽工業株式会社）、ギター教室の案内、当時デパートにまで出店していた銀座の老舗楽器店の広告などで、楽器店のページには 20 回払いまでギターが購入できることも明記されている。このような冊子が若者世代に最も人気のあった男性雑誌の付録にまでなっていたことこそ、当時のフォーク音楽の絶大な人気を伝えてくれるものである。

図表5は、この冊子に掲載されていた英語の楽曲をリストアップしたものである。そのほとんどが、モダン・フォークのスタンダードナンバーばかりであるものの、「アメリカのフォーク」とうたいながらも、〈ザ・ビートルズ〉の楽曲 2 曲も加わっている。

このブームの火付け役でもあったコピーバンドからは、歌詞の日本語訳を試み、さらには自らの作詞・作曲による日本語のオリジナル作品を披露するものも現れるようになった。こ

のようなスタイルでバンド活動をする者たちはカレッジ・フォークというジャンルで呼ばれていたが、その活動拠点は主に東京でも山の手を中心とした大学を中心としていた。このブームの核となっていた者たちで、ステージに立つものにも、その聴衆たちにも、アメリカ本国でのフォーク活動は、採譜した伝統音楽を新しい発想で再現することを目指し、民衆の精神をくみ取ることから発生したという本来の存在意義から、フォーク音楽は権力者に対峙するプロテストの手段としても用いられるようになっていったという経過や、その歴史的・社会的背景までをも理解しようとするスタンスはほとんど見られなかった。日本において、社会の矛盾や社会体制や政治権力を批判する楽曲やフォーク集会など、フォークソングをプロテスト活動の手段とするものたちが登場するのは、1960年代の後半からであり、このようなムーブメントの担い手たちは、文化地理学的にはカレッジ・フォークとは異なるテリトリーの者たちであった。

ここで焦点を当てたフォーク・グループの来日公演を心待ちにするファン・コミュニティの大半は、敗戦から日本の復興を戦中派の親世代が獲得した中流のライフスタイルの中で育ち、将来も安定したキャリア形成を望むような指向性が求められた時代を生きる者たちであった。そのファン・コミュニティでは、日本人の苦手な英語の発音を克服し、外国語学習者として英語圏の楽曲をいかに忠実に再現し、またギターなどの演奏のスキルをいかに本場に近づけることができるのかといったような技術的な側面を重視する傾向にあったからこそ、当時のアメリカのモダン・フォークに内包されていた政治活動的な側面が日本ではそぎ落とされることで、受け入れやすい音楽のジャンルとして幅広く受容されていくことになった。

この時期のカッレジ・フォーク・グループのコミュニティからは、その後日本のポピュラー音楽やメディア産業が商業主義優先の文化産業として発展するうえで担い手となった者たちも排出している。占領期以降の日本のポピュラー音楽界では、欧米好みの嗜好性を反映したものや、欧米のヒット曲と類似性の高い楽曲が作り出され、またクラシック音楽や歌謡曲などと融合させた楽曲が作り出されることで日本独自のポピュラー音楽シーンが形成されていった。アメリカのフォークソングは、日本のモダン・フォーク・ブームの愛好家たちによって明るく爽やかな洋楽として愛好者の裾野を広げ、それは歌謡曲や演歌のようにペントナミックをベースに愛憎や情念などを描くという従来の大衆音楽に見られた縛りから解放され、因習にとらわれない新しい時代にふさわしい世界観を感じられる音楽シーンを作り出した点において日本のポピュラー音楽に足跡を残したのではないだろうか。

おわりに

今でも欧米のポピュラー音楽の愛好者たちが集まったとき最も盛り上るのは、話題に上がったアーティストの来日公演に行ったかどうかという点に話が及んだ時である。またさら

1960年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

に、話題が〈ザ・ビートルズ〉に及ぶ折の武道館のビートルズ公演の体験者に対する周囲のものたちの反応は、格別なものになる。〈ザ・ビートルズ〉の日本公演の時、筆者はまだ小学生であったために白黒テレビでしか見ることはできなかつたし、グループとしての活動期間が短かったこともあり、〈ザ・ビートルズ〉のライブ鑑賞はかなわぬ夢に終わったものの、〈ローリング・ストーンズ〉に関しては、初来日の公演や、年齢を重ねながらもオリジナルメンバーで来日した2006年のライブで至福の時間を過ごせた折には、1960年代のスティングング・ロンドンのうねりの中から躍り出て日本に届いたばかりの楽曲を、自らがDJを務めたラジオの深夜放送番組で紹介してくれた島津靖雄さん（元CBCアナウンサー、1960年代名古屋の深夜放送ブームをけん引した）のおかげと、感謝の気持ちでいっぱいになった。

戦後生まれとして、焼け跡から立ち上がった戦後の日本になだれ込んでいた海外からのポピュラー音楽と当時の日本人はどうのように向き合ってきたのだろうかという疑問が、この研究の出発点であった。とりわけ、レコードやラジオで見聞きしていたアーティストの来日公演はファンには心躍る最高の瞬間でもあり、アーティスト達にとっても、ファンたちの視線を集めながら、異国の地にまで自らの作品が送り届けられていることを確認できるうれしい場ともなる。本論では1960年代に焦点をあてて、アメリカや英国からどのようなアーティストたちが来日し、日本人たちにポピュラー音楽という種まきをしたのかを考察した。

当時の訪日ミュージシャンの再確認は、決して〈ザ・ビートルズ〉一辺倒ではなく、多面的・重層的な音楽シーンが、欧米の様々なポピュラー音楽が紹介されることで形成されていったことを示唆するものである。本論では、カントリーとモダン・フォークのグループに焦点を当てたが、両者ともに、享受したのは大学生たちで、大学のサークル活動として本国のグループのような音楽空間の再生を目指す若者たちがその中にいた。当時の学生たちもすでに前期・後期高齢者となっているが、半世紀以上を経てもなお、バンド活動を含めて、若いころに出会った楽曲やアーティストへの思いは変わることなく持ち続けているようである。

文字数が限られているため、エレキ・ギターを携えたポピュラー音楽の伝道師たちの中で、〈ザ・ビートルズ〉と並んで日本のポピュラー音楽に多大な影響を与えた〈ベンチャーズ〉について、本論の図表の中に来日して繰り返し公演活動を行った記録が残されているにも関わらず検証することができなかった。日本人とギターの関係性も、日本人と欧米のポピュラーミュージックの受容を考えるうえで重要な切り口でもあると考えられるので次への課題としたい。

また、本論で目指した、外国文化の流入と受容は、文化的地理（Cultural Geography）をどのように変えるのであろうかという問いには、まだまだ一次資料の涉獵と緻密な研究を継続する必要があると実感している。

注——

1) 三井 (2018) 6 頁。

- 2) 例えばフランク・シナトラ (Frank Sinatra) は1962年4月18日に来日し、20日に赤坂のミカドの舞台に立っている。草野 (1995) 229頁。
- 3) Deller他 (1977) 42-45頁。
- 4) Deller他 (1977) 9-10頁。
- 5) Deller他 (1977) 15頁。セッション・ギタリストは、レコーディングの際にギターの部分を請け負うギタリストのこと。間奏の部分にはギター演奏者がソロ演奏をする部分が必ず含まれており、人気ポーカルの楽曲の完成度を上げることに重要な役割を担う。カントリー音楽のファンに限らず、リリースされたレコードには、どのようなセッション・ギタリストをレコーディングで採用しているのかという点に注目するファンは多くいる。
- 6) 1975年の公演会場は、新宿厚生年金会館、神奈川県民ホール、中野サンプラザ、神戸国際会館、大阪フェスティバル・ホールとなっている。青柳 (1987) 241頁。
- 7) Deller他 (1977) 171-172頁。
- 8) 『ミュージック・ライフ』は1951（昭和26）年9月に新興楽譜出版社によって発刊されたポピュラー音楽ファンのための雑誌である。三井 (2018) 44頁。
- 9) 青柳 (1987) 143頁。
- 10) 青柳 (1987) 172-173頁。キングストン・トリオは1967年に解散した。
- 11) キャードー東京のプレス・リリースに掲載されている東京・大阪以外に巡回した地方都市を列挙すると以下のようになる：
- 横浜、松山、札幌、広島、小倉、松江、宇都宮、仙台、函館、苫小牧、川崎、高崎、平塚、千葉、清水、名古屋、福井、神戸、高知、佐世保、福岡、久留米、鹿児島、京都、松本、吉原
- この広報資料では、グループ名を「プラザーズ・フォア」としているが、本論では、拠り所とした三井の文献 (2018) で使用されていた「プラザーズ・フォー」を用いることとした。
- 12) 岡部 (1976) 121頁。
- 13) 公演会場や巡回した都市は、新宿厚生年金会館、広島、大阪、名古屋、東京、東京音協例会、となっている。草野 (1995) 232頁。
- 14) 1967年来日時の公演会場は、日比谷公会堂、横浜体育館、名古屋金山体育館、武道館、京都会館、福岡九電記念体育館、大阪フェスティバル・ホール、松山市民会館となっている。草野 (1995) 233頁。

参考文献

- 青柳茂樹編『ポップス黄金時代 1955-1964 ロックンロール誕生からリバプール・サウンド登場まで』(シンコーミュージック、1987)
- 朝日新聞 1966（昭和41）年4月24日「フォークソング大はやり」
- 飯塚恒雄『レコード・マンの世紀』(愛育社、2012)
- 岡部迪子『ポピュラー・スター事典』(水星社、1976)
- Guitar Magazine「麻田浩 レジェンドを見続けた男が語る日本とアメリカのカントリー観」488号 2019年2月 68-71頁。
- キャードー東京 東京興行部『10度目の来日／原点にもどった プラザーズ・フォア ラブサウンズ32』Love Sounds Press Release 第62号 1973（昭和48）年8月10日

1960年代の来日公演と欧米のポピュラー音楽の受容

草野昌一『ライヴ・イン・ジャパン～ロック感動の来日公演史～』（シンコーミュージック、1995）228-234頁。

渋谷陽一『ロックは語れない』（新潮社、1987）

Stevens, Carolyn S. *The Beatles in Japan* (Routledge, 2018)

Deller, Fred, Roy Thompson and Douglas B. Green *The Illustrated Encyclopedia of Country Music* (HARMONY BOOKS, 1977)

ホイットバーン、ジョエル編／小倉エージ日本語監修『ビルボード・トップ40 アルバム 1955-1986』（音楽之友社、1989）

前田祥史・手塚康司編著『日本のフォーク&ロックヒストリー① 60年代フォークの時代』（シンコーミュージック、1993）

三井徹『戦後洋楽ポピュラー史 1945-1975 資料が語る受容熱』（NTT出版、2018）

水上はるこ『ロック・シーン』（シンコーミュージック、1973）